

トルコへの恩返し胸に

患者治療に奮闘

【ワン(トルコ東部) 共同】23日に大規模地震が起きたトルコ東部の被災地で、国際医療ボランティア・AMDA(本部・岡山市)から派遣された2人の日本人医師が奮闘している。「力の限りを尽くしたい」。東日本大震災で支援をしてくれたトルコ国民への恩返しの気持ちを胸に、現地で医療チームに加わり、次々と運ばれてくる患者を治療している。

AMDAから派遣 医師2人

外科医の大類隼人さん(30)＝神戸市＝と神経内科医の淵崎祐一さん(67)＝福岡市。最大被災地の一つエルジシュで負傷した被災者が搬送されてくる拠点の臨時診療所で活動している。

地震発生翌日の24日に日本を出発。「とにかく早く被災地に行かなければという気持ちだった」と大類さん。25日夕にはエルジシュに到着、すぐに患者の治療に取り掛かった。

「でも全力を尽くすことに変わりはないが、今回は特に何とかしたいという気持ちがい」と語る。

30日にはエルジシュを離れ帰国する2人。地震発生から数日が過ぎ、重傷者は徐々に減っているが、淵崎さんは「時間が許す限り、必要とされることほとんどなんでも精いっぱい協力したい」と力を込めた。



トルコ東部エルジシュで医療支援活動を行っている大類隼人さん(左)と淵崎祐一さん(右)

＝27日(共同)

震災で大きな被害が出

同診療所には、心肺停止状態の患者や頭部を負傷して大量の血を流す男性など、27日午後までに約1400人が運ばれてきた。大類さんと淵崎さんは多い日で20～30人の患者を担当する。トルコの医師からは「ありがとう」と感謝の言葉を掛けられるが、2人が返す言葉は「困った時はお互いさまたよ」。

大類さんは東日本大